

# イスタンブールにて

松葉良

日本から、イスタンブール直行の航空機がないので、チューリッヒからローマに行き、アリアリアでイスタンブールにやっと到着した。始めて見る風景、それは東と西との混沌とした情景の中に奇妙ともいえる調和を強く感じた。それはシルクロードの辿った道の最後の終着点という旅愁のようなものであったかも知れない。

ペラパレスという極めて古めかしいホテルに着いて、現在は殆んど見ることもない旧式のエレベーターに乗ったのであるが、その中に次のような言葉のプレートがあるのに気がついた。そこには英国の作家、アガサ・クリステイがこのホテルの部屋でオリエンタル急行殺人事件を創作したという言葉が眼に入るのである。そして天井の極めて高い古めかしいロビーでトル

ココーヒーを飲んだのであるが、そのほろ苦い味の中に急にチャイコフスキーの第五シムフォニーのワルツの部分が耳の底で鳴っているように感じた。

何故であらうか。それはホテルに着く途中、始めて見たボスボラス海峡の情景に接した時、急にイスタンブールであるよりはコンスタンチノープルのことを考え始めたからかも知れない。それは今は見ることでできない煙をたなびかせてゆきぎする船とモスクとミナレットの点在する町並を、そしてまたくずれかかった家並を眺めたからであらう。

ふとロビーのすみにグラランドピアノが置かれてあるのに気がついた。象牙の部分は何箇所もはがれてしまっていたが、その音は古雅であった。夜のホテルの食事には

西と東の異った人種の十カ国位の人達が集まっていた。そしてシンセサイザーを伴う小さなアンサンブルが各国の音楽を次々と演奏していた。

翌日、イスタンブールの郊外にあるフランスの文学者ピエール・ロテイの山荘に出かけてみた。ピエール・ロテイは日本にも滞在して「お菊さん」等によって知られている文学者である。その山荘は小さな町から少し離れた高台の上で金角湾を望む不思議な光景の場所であった。その部屋は東洋趣味そのもののように畳に似たござに近いものが敷かれていた。

そして何枚かのロテイの古い写真が壁に張られていた。山荘の裏は墓地が連なっていた。糸杉のある谷をへだてた家並は極めて美しかった。その丘から家並の遠景をス

ケッチしていた時、いつのまにか十数人の子供達が集ってきて、そして親しげに話しかけるのであるが、何回も出てくるジャボンという言葉しか分らなかつた。その子供達の表情を見ていると東洋的なものと西洋的なものが入りまざっていた。長い歴史の中での東洋と西洋との混血がこのような表情を作り出したのであろうか。

三日目にはアヤソフィアを訪れた。そのドームの中にあるビザンチン時代の宗教的な壁画をまのあたり眺めた時、はるばるイスタンブールを訪れた最大の喜びを感じたのである。その美しさはあくまでイスタンブールの世界ではなくビザンチンとしてのコンスタンチノープルの栄光をまざまざと感じることが出来たのである。くすんだ金色と黒の背景ではあったが、長い歴史がしみこんだようなその壁の色の中に無限の美しさを感じることが出来たのである。そのモザイクは移動することの出来ないものであり、その美しさはビザンチン一千年の歴史の中にイスタンブールと共に永遠に息づいていた。

しかし壁には大きな円形の黒い盤の上に

書かれた金文字の装飾的なコーランの言葉が、数多く飾られていたが、ドームの中で異様な感じを与えるだけで、美的な要素は何も感じられなかつた。

このアヤソフィアの聖堂はコンスタンチノープルの空に浮び上っていた。高さ五十五メートルに達するものであり、五三七年にユステイアヌスが建造したもので、その後九世紀にわたって、ギリシャ正教の中で中樞ともいえるものであった。この時代に作られたビザンチン美術の偉大さを、イスタンブールを訪れて始めて強烈に感じるこゝとが出来たのである。確に聖ソフィア南階上のモザイク、キリストを中に左がコンスタンティノス九世、右が皇妃ゾエはずばらしいものであった。

四日目はオスマン・トルコの築いた城砦ルメリ・ヒサールを訪れた。この城砦はビザンチン帝国一千年の歴史が崩れさる要因になる。メフメット二世がコンスタンチノープルを攻略するため海峡の最も狭部に建てた城である。この城砦の中は訪れる人も少なく極めて静寂であつた。私は城内の丘の斜面に坐つて対岸のアナドル・ヒサール

を眺めていた。斜面には春の残りの花々がまだ咲き乱れていた。

五日目にトプカピ宮殿と競馬場跡を訪れる。膨大な金銀と宝石の作品とイスラムのミニアチュール等そして後宮、それらはオスマントルコの一場の夢の如くはかなかつたし、余り興味もなかつた。この日は疲れきつてしまつた。夜ホテルに帰ると、近くの広場ではトルコの音楽が奏されていた。

次の日もその翌日もイスタンブールの市内を、描くモチーフを求めて歩き廻つた。不思議な建物であるガラタ塔に登り、そこで見たアジア地区とヨーロッパ地区のイスタンブールの遠景がその長い歴史の中でおこつた数々の血なま臭い光景を消し、雑然としながら現在に息づいているビザンチンの光芒を思つた時、何故か急に再びチャイコフスキーの旋律が心の中で鳴り響いたのである。

そのことはチャイコフスキーがロシア人でありながら他のロシアの作曲家と異つて、常に東洋と西洋のはざままで作曲したところに要因があるのかも知れない。